



塾生さん、いま何してる？



令和4年度オケクラフト作り手養成塾 入塾生
右)永井 悠太さん
左)河越 義雄さん

『新たなはじまり～入塾式～』

オケクラフト作り手養成塾では、今年度から塾生の募集に期間を設けず、随時、受け入れを可能とし募集を開始しました。先月開かれた入塾式では、二名が養成塾に入塾し、新しいスタートがきられています。

岡山県出身で、札幌より家族四人で置戸町に移住された永悠太さんは、小さなお子さんから高齢の方まで、幅広く使用されるクラフト製作を目標に、独立後の工房には地域の方が気軽に立ち寄れる空間を作っていました。この思いを述べられました。

芦別出身で現在滝川市でかれている河越義雄さんは、味である木軸ペンの収集から身でも製作をしてみたい。と念が起。挑戦に年齢は関係ない。と今回作り手養成塾へ入塾されました。お二人ともこれから年をかけてオケクラフトの作り手となる技術・知識を身につけていきます。

来月のあれこれからは、二名の塾生の作業風景についてご紹介していきます。

【日常使いの刃物 - 和包丁と洋包丁 -】

現在、どま工房では秋岡コレクションの企画展を開催しています。展示のメイン資料は「鉄(はさみ)」。およそ300点の様々な鉄がご覧いただけます。また、鉄の展示とあわせて、鉄と同じく日常使いの刃物である「包丁」の展示も行っています。今回は、この包丁についてご紹介していきます。

日常使いの包丁(料理包丁)は、和包丁と洋包丁に大きく分けられます。和包丁は、出刃包丁や菜切包丁、柳刃包丁など用途によって形状もさまざまに種類がありますが、基本的に片刃でつくられます。これには日本で包丁が広まった時代が関係しています。今日につながる和包丁が、日本で普及したのは江戸時代になってから。世情が安定し、それまで武具を製造していた刀鍛冶や鉄砲鍛冶が次第に包丁鍛冶へと変わっていきました。そのため和包丁のほとんどが、日本刀と同じ軟質の地金と、硬質の鋼を鍛接する付刃金法によって製造される片刃となっています。一方明治以降に欧米から伝えられた洋包丁は、一枚の鋼板を切り抜いて刃を研ぎ出す両刃が基本となりました。

今日は何を知ろうか



〔絵引〕民具の事典 参考

今月の一品

かくれた一品 おすすめの一品
毎日 オケクラフトとともにいる
私たちの一品をご紹介します!

樹種: シラカバ
価格: 大) 4,400円(税込)
小) 4,180円(税込)
サイズ: 大) 直径120mm×高さ70mm
小) 直径105mm×高さ65mm

(工房 清田作)です。
置戸町有林の白樺材が使用されていて、どっしりとした安定感があります。

わたしの今月の1品は、「丸椀」
高台はないのですが、その持ちやすさと吸い口の飲みやすさは、手に持つて飲むことを意識して工夫された優れものです。

汁碗としてもスープボウルとしても使える「丸椀」。

寒くなるこの季節におすすめの一品です。



ショップ販売員
青木

今月は!

【身近な木の変化～色が変わる・紅葉の不思議～】

北海道では一足はやく始まった紅葉ですが、全国では十月の中旬から十二月頃にかけて紅葉の見頃を迎えます。今回のモクモクさんはいつもと趣向をかえて、「なぜ木は紅葉するのか?」について簡単にご紹介します。

【紅葉は樹木の冬支度】

モクモクさん
今月のモノづくりはなんですか?

◎そもそも樹木の葉が緑に見えるのは? ↓植物の葉が日中行っている光合成。この時、効率よく光を吸収するために働くのが「クロロフィル」という色素です。葉緑体に含まれていて、光の三原色(赤、青、緑)のうち、赤と青を吸収し、緑の光を反射するため、植物の葉は緑に見えます。紅葉にはこの「クロロフィル」の変化が関係してきます。

秋になり気温が低くなると、光合成などの反応速度が遅くなるほか、日照時間が減り太陽の光も弱まるため、十分な養分を生産できなくなります。そのため樹木は、冬が来る前に消費エネルギーを少なくし、葉の働きを徐々にとめていきます。消費エネルギーを節約するために、水や養分の行き來を減らすバリアを作つてみたり、クロロフィルを分解して養分に変えたりもします。このためクロロフィルが減り、緑色がしだいに弱くなっています。葉の緑色が弱くなると、もとからあった別の色素が目立つようになります。葉のエネルギーを減らすバリアを作つてみたり、クロロフィルを分解して養分が減ることで、もとからある別の色素が目立つ現象のことを行います。

毎月
1日発行
森林工芸館
発行

こちらのQRコードから
森林工芸館のあれこれ
バッケンバーをご覧いただけます。

